



[レース回顧]

ハイレベルなクラシック戦線で ひとときわ輝いた「特別な存在」

The 82nd
Tokyo Yushun
2015.5.31

第82回日本ダービーは、皐月賞馬ドウラメンテが単勝1.9倍の1番人気となり、皐月賞2着のリアルスティール、皐月賞1番人気のサトノクラウンがこれに続いてレースを迎えた。二冠を狙う1番人気馬と、逆転に懸けたライバルたちの戦いを振り返っていこう。

横手礼一 = 文
text by Reichi Yokote

タレント揃いの世代だからこそ
競馬の質を磨く必要があった

ドウラメンテのダービーでの単勝支持率は、最終的に40%を超えた。確定オッズは190円。
1984年のグレード制導入から昨年までのダービーで単勝100円台の人気に支持された皐月賞馬は、シンボリルドルフ、トウカイテイオー、ナリタブライアン、ディープインパクトの4頭で、ダービーでの勝率は10割。というよりも、いずれも殿堂入りを果たした銜々たる顔ぶれであることにまず目が行く。

5頭目がドウラメンテ。過去の4頭と同様に危なげのない競馬でダービーを制し、名馬の列の末尾に加わった。5頭を並べても、現時点でそれほど違和感を覚えなない。今年の3歳世代には、顕彰馬と並び立てるような特別な存在が潜んでいたのだ。
「潜んでいた」と書いたのは、やや正確さに欠ける。ドウラメンテの資質の素晴らしさについては、デビュー当初から多くの人が認めるところだった。新馬戦から出走したレースではいつも単勝オッズは100円台。重賞初挑戦の共同通信杯でもそれは変わらなかった。このレースでクラシックの主役が明らかになることを、多くのファンから期待されていた。

しかし、誤算が二つあってドウラメンテのブレイクはお預けになる。一つは、気性の激しさがレースで折り合い難となつて露呈したこと。鞍上の指示に逆らつて頭を上げながら下がっていく場面がタ

ービジョンに映し出されて、場内はどよめいた。体力を消耗しながらも早めの仕掛けで巻き返して、直線ではいったん先頭に立った。このまま押し切っていれば、前半の不手際もこの馬の怪物性を物語るエピソードになっていただろう。

ところが、ここで二つ目の誤算が発生する。もう一頭強い馬がいたのだ。

のちにプリンシパルSを制するアンビシヤスは3着、毎日杯を制するミューゼイリアンは4着と、「普通の強豪」は抑え込んだが、ロスの多い競馬では負かすことができない相手が一頭いた。リアルスティールだった。

トウカイテイオーもナリタブライアンもディープインパクトも、圧倒的人気で春の二冠を制するような名馬は、大きく外を回る安全策が許されるだけの能力的な安全圏にいた。ドウラメンテも例年ならば、荒削りだが迫力満点の共同通信杯勝ち馬として皐月賞に駒を進めていた可能性が高い。

そうならなかったのは、今年のクラシック戦線にタレントが揃っていたからだ。リアルスティールにしても、次走のスプリングSでは朝日杯フューチュリティSの覇者ダノンブラチナは負かしたものの、一歩先に抜け出していたキタサンブラックをクビ差捉えられず2着に敗れた。

負けて強しの内容だったが、いくら強くても本番で負けては意味がない。タレント揃いの世代だからこそ、素質の高さだけでなく競馬の質を磨かないとライバルたちを上回ることができない。今年の牡馬クラシック戦線で1番人気が続々に



最後の直線、内からはサトノラーゼン、大外からはサトノクラウンが末脚を伸ばすが、馬場の真ん中からドウラメンテが突き抜けた



S.Suzuki

続いていた。直線が長い東京競馬場と言っても、前走同様に後方一気の強引な競馬で前を行く馬たちを一蹴できるのか。

圧倒的な身体能力に対する信頼と、一つ歯車が狂ったときの精神的な脆さに対する懸念。すでにスターホースになりつつあったドウラメンテに一抹の不安も感じたのは、相反する二つのイメージが綱引きをしていたからだろう。それはライバル陣営にとっては、打倒ドウラメンテに向けた突破口ともなる。

一つの糸口は、前で競馬をすることだ。ドウラメンテほどの末脚に恵まれない馬たちは、リスクを冒して序盤に脚を使つてリードを稼いで、本命馬のミス等待つしかない。ゲートが開くと、外枠からキタサンブラック、タガノエスプレッソ、スピリッツミノル、内からコメート、さらにそれらを制して真ん中からミュゼエイリアン。5頭がいち早く飛び出して先頭集団を形成した。

リアルスティールの福永騎手は手綱を引いて、隣から出たドウラメンテを先に行かせる。この馬は共同通信杯では脚を温存する競馬でドウラメンテを差し切った経験があり、ドウラメンテ・マークがダービーでの作戦だったようだ。

外枠からのスタートで、ドウラメンテは前に壁を作れない。先行各馬を気負って追いかける格好になり、1→2コーナーにかけてデューロ騎手が手綱を持つていかれそうになった。

しかし、向正面に入る頃には落ち着きを取り戻した。共同通信杯の悪夢を回避できたのは、一つにはベースがある。共



横山典弘騎手が出ムチを入れてミュゼエイリアンが迷いなく逃げる。皐月賞でも先行して3着に粘ったキタサンブラックが2番手に続いてレースを引っ張っていった



1周目のスタンド前。ドウラメンテは好スタートを切った馬たちを内に見ながら、外から来たスピリッツミノルも行かせる。リアルスティールはそのドウラメンテを後ろから見る位置取り

The 82nd
Tokyo Yushun
2015.5.31

敗れていったのは、レベルの高さの一つの証明でもあった。

前哨戦の敗北を受けて、リアルスティール陣営が皐月賞で出した答えは「先行策」だった。小回りの中山競馬場への対応であり、前走敗れたキタサンブラックへの対策でもあったろう。

一方のドウラメンテは、ミルコ・デムロ騎手への乗り替わり初戦ということもあってレース序盤から後方で折り合いに専念。他馬の動向には目をつぶって、自身の能力を出し切ることに徹した。

皐月賞を勝つための戦術としては、リアルスティールが満点だったが、ドウラメンテは皐月賞のセオリ―を無視した位置取りから暴力的なまでの末脚を繰り出して大逆転。レース後にリアルスティールの福永祐一騎手が「完敗」を口にしたように、この時点でライバルたちとドウラメンテの差を分けたのは、すでに絶対能力の差だったのだろう。

1番人気馬が持っていた相反する二つのイメージ

皐月賞では劇的な形で「一強」が宣言される結果になったが、それでもライバルたちはダービーに向けて白旗を掲げるわけにはいかない。荒削りな皐月賞馬には弱点がいくつかある。

折り合いの問題は解決されたと言えるのか。淀みないベースの皐月賞では噴出しなかったが、遅い流れになったときに共同通信杯の二の舞がないか。

また、今年の5月は雨が少なく芝の状態が良好で、先行馬に有利な馬場状態が



当たり前のことのようにあっさりと、
ドウラメンテはダービー馬になった。



第82回東京優駿(日本ダービー)(GI) | 5.31 東京 晴・良 芝2400m 国際 指定 18頭

着順馬番	馬名	性齢	斤量	騎手	タイム(差)	単勝(オッズ)	調教師
1 ⑭	ドウラメンテ	牡3	57	M.デムーロ	2:23.2	1.9①	堀 宣行(美浦)
2 ①	サトノラーゼン	牡3	57	岩田康誠	1¾	18.7⑤	池江泰寿(栗東)
3 ⑪	サトノクラウン	牡3	57	C.ルメール	ハナ	6.3③	堀 宣行(美浦)
4 ⑬	リアルスティール	牡3	57	福永祐一	2	3.8②	矢作芳人(栗東)
5 ③	コメート	牡3	57	嘉藤貴行	¾	234.9⑯	土田 稔(美浦)

6 着以下ミューゼスルタン、タンタアレグリア、グアンチャーレ、レーヴミストラル、ミュゼエイリアン、ダノンメジャー、ボルトドートウィユ、タガノエスプレッソ、キタサンブラック、ベルラップ、コスモナインボール、アダムスブリッジ、スピリッツミノル

単勝⑭190円(1¼) 複勝⑭130円(1¼) ①310円(4¼) ⑪210円(3¼) 枠連①-⑦580円(3¼)
馬連①-⑭1980円(5¼) ワイド①-⑭730円(5¼) ①-⑭400円(2¼) ①-⑪1420円(14¼)
馬単⑭-①2220円(5¼) 3連複①-⑭43950円(9¼) 3連単⑭-①15760円(36¼)



春の牡馬クラシック二冠制覇は、のちの三冠馬を含めて23頭目。
1 番人気でのダービー制覇は一昨年のキズナ以来、34頭目となる

Y.Hamano

H.Watanabe



「そう、この意味では、今年のダービーの真価もこれから明らかにするはずだ。ともすれば私たちはダービーをゴールとして考えてしまうが、実際には経由地の一つに過ぎない。彼らの競走生活は始まったばかりで、自身の価値を示すための戦いはこれから本番だ。」

🐾

2のダービーレコード。父キングカメハメハが残した記録を11年ぶりに更新した。
2 着サトノラーゼンとの着差は1馬身¾で、ナリタブライアンやディープインパクトのような派手な圧勝劇を望んだファンは不満も感じたかもしれないが、たとえばキングカメハメハのダービーでの着差も1馬身½だった。2着に敗れたハーツクライ以下、5着のスズカマンボ、6着のダイワメジャーも種牡馬として成功して、レベルの高いダービーだったことをあらためて証明している。

同通信杯は1000mの通過が60秒0、皀月賞では59秒2、そしてダービーでは58秒8だった。ダービーの1000m通過が58秒台になるのは非常に珍しいことだ。ライバルたちが刻んだ強気のラップにも助けられた格好で、ドウラメンテは最大の危機を脱した。気がつけば、先行集団を射程に入れた中団外目という絶好の位置取り。今年のダービーはこの時点で勝負があったと言える。

余力充分でレコードを更新
その真価はこれから明らかに

余力充分に計時した時計は、2分23秒

驚きに満ちた皀月賞とは対照的に、当たり前のようにあっさりと、ドウラメンテはダービー馬になった。

トノラーゼンを振り切ると、坂の上りで早くも先頭に立った。
マークに回ったリアルスティールは道中のリズムが悪く、直線では舌を出して追撃が捗らない(のちに軽度の骨折が判明)。追い込んできたサトノクラウン、ミューゼスルタンは位置取りが後ろすぎて、勝ち馬を脅かすところまで迫れない。

勝ちタイム2分23秒2はダービーレコード。
父が残した記録を11年ぶりに更新。

Y.Maeda



2012年に生まれたサラブレッド6897頭の頂点に立ったドウラメンテ。
世代の頂点から新たな頂点へと、これからも戦いは続く